



2郡4か村井戸一つ

福津市と古賀市の境には一つの井戸があります。この井戸は、旦ノ原の井戸と呼ばれ、ここが唐津街道と言われていた江戸時代に作られました。今回は、「旦ノ原の井戸」のお話を紹介します。



▲深さが約21mあったという石積みの井戸

古賀市との境にある飯盛山の麓には、唐津街道が通る旦ノ原という地域があります。この四辻は、かつての糟屋・宗像2郡4か村（筵内村、薦野村、内殿村、上西郷村）が交わり、畦町宿と古賀市の青柳宿の引き継ぎの場でもありました。しかし、この場所は丘陵に当たるため、水がなく人々はいつも困り果てていました。この状態を何とかしようと、ここに住んでいた伊東忠平は、井戸を掘ることを庄屋に訴えました。そうして文久二年（1862年）、忠平の屋敷で井戸掘りが始まり、翌年に井戸が完成。それ以来、近くに住む人や、街道を行き来する旅人にとっては無くてはならない大切なものとなりました。後にこの地は「2郡4か村井戸一つ」と呼ばれるようになりました。多くの人の往来と時代の移り変わりを見守ってきたこの井戸は、今も古賀市に残っています。

